3　魅力あるエコツアーの企画のために

3－1　エコツアーの魅力アップのための4条件

エコツアーの魅力を高めるためには、⑴～⑷の４つの条件を整える必要があります。

⑴　質の高いガイド

ガイドは現地で旅行者に直接接し、情報や体験を提供する人で、エコツアー実施においてもっとも重要な役割を果たします。ガイドは観光対象（自然や歴史、暮らしなど）と旅行者、そして地域住民とのつなぎ役でもあります。そのため、対応するガイドの力量次第で、ツアールートが同じでも、旅行者の満足度は大きく変わります。すぐれたガイドには①～④の資質が求められます。

① 自然の魅力や価値等を、旅行者にわかりやすく伝えることができる、良きインタープリター (翻訳者)であること
② 旅行者の興味や関心を効果的に引き出すことができる、良きファシリテーターであること
③ ときには旅行者を楽しませるエンターテイナーにもなれること
④ エコツーリズムの目的や意義を正しく理解し、環境保全のために守るべきルールを伝え、旅行者の安心と安全に配慮できること

⑵　余裕

旅行者が自身の体験を通して旅を味わうためには、旅行者の心身に余裕がなければなりません。とくに「時間の余裕」、「体力の余裕」、「知的な余裕」が大切です。旅行者の経験や体力、あるいは興味関心等を考慮し、時間的、体力的にも無理な行程にならないように注意しなければなりません。また、短時間の中で、早口に、あれもこれもと情報を詰め込むと、かえって旅の楽しみを損ねてしまう心配があります。あくまでも旅行者のニーズに無理なく応えることが大切です。

⑶　適正規模

⑵の余裕の確保とも関連しますが、ツアーの適正規模(人数)への配慮も重要です。旅行者とガイドが相互に良いコミュニケーションを保ちつつ，プログラムに集中できるようにするためには，行動を共にするツアーの人数にも制限が必要です。自然環境に極力負荷を与えないためにも、特定の場所に一度に大勢の人が集中することは避けなければなりません。ツアーの適正人数は活動の中身や開催場所の自然条件等によっても変わるため、一律には決められませんが目安となる条件はあります。説明が必要な場面でガイドが話す肉声が参加者全員に届くこと、また個々の旅行者がガイドに質問がしやすい環境が保たれることが考えられます。

４章で紹介するツアーの例「自然史王国信州を歩く」シリーズでは、２名ないし３名のスタッフが前後につき、途中の山道を一列に歩いて移動するという条件で、原則定員20名で参加者を募集しました。なお、日本山岳ガイド協会の「ガイド・マニュアル自然ガイド編」(2009)によると、低山歩きを主体とした自然観察ツアーの場合，一人のガイドに対して一グループ10～15名の参加者が限度とされています。これもひとつの目安として参考になります。

⑷　参加意識を育てる

魅力的なエコツアーが成立するためには、旅行者自身に主体的に参加意識をもってもらうことが重要です。ツアープログラムに集中し、ガイドとの交流や交感を通して楽しめるかどうかは、参加者自身の意識によっても左右されます。たとえば環境保全のためのルールとして、立ち入りを制限する箇所があったとします。それをエコツアーの前提となる当然の責任ととらえる

か、あるいはわずらわしい規制ととらえるかは意識によって大きく変わります。心の持ちようで、多少の不便さを逆に楽しみに変えられる場合もあります。そのため、企画する側は、なるべく募集段階から案内チラシ等を通じて旅の趣旨を旅行者に正しく伝えるようにします。またツアーの最中でも、説明だけでなく要所に適度な問いかけを織り込むなど、一人一人の参加意識を高めるための工夫が求められます.

旅行者自身が、目的をもつエコツアーであることを理解したうえで参加できるようにしないと、後で旅行者が「こんな旅なら参加するんじゃなかった」と感じてしまうことにもなりかねません。

３－２　ツアープログラムづくりの留意点

ツアーの時期、場所、移動手段、観光ルート、見どころ箇所、休憩箇所、時間配分、提供する話題などについて事前に検討し、ツアープログラムを作成します。プログラムの作成は、ツアーのはじまりから終わりまでの一連の流れをあらかじめ想定しておくもので、ドラマにおけるシナリオづくりに相当します。以下の⑴～⑸が留意すべきポイントです。

⑴　テーマ設定（ツアーの趣旨）

テーマはツアー参加者募集にあたってのキャッチコピーにもなります。

旅行者に、エコツアー企画の趣旨を正しく伝え、興味関心を引き立てて、効果的に参加者を集める上で、テーマ設定は重要です。テーマは、ツアーを通してもっとも伝えたいことを、わかりやすく、簡潔に、可能な限り効果的に表現することが大切です。内容が正確であることは当然ですが、理想的には、おしゃれなセンスも求められます。魅力的なエコツアーは、テーマ設定の段階からすでに始まっています。

⑵　物語性の構築

旅行者が期待するのは、単に知識を得ることではありません。インターネットでの検索や書籍などでは得られない生の体験を通して、気づきや驚きを伴う知的な満足を得ることにあります。商品としてエコツアーを企画するには、そのような旅行者のニーズに応えるための工夫がなければなりません。多くの場合、見たことや知ったことのすべてが、そのままその人の体験として記憶されるわけではありません。むしろ印象深く記憶されるのは、体験したことのほんの一握りの情報に限られます。どうすれば良い思い出として記憶してもらえるかですが、そこで役に立つのが物語性の付与です。たとえば伝説や昔話のように、ある情報をもとにひとつの物語が構築されていると、感情への働きかけとともに、情報が記憶に刻まれるのを助けてくれます。一見無味乾燥のように感じられる情報であっても、それが物語の中にきちんと位置づけられることによって意味が深まり、情報がもつ本当の価値に得心がいくことがあります。

⑶　見どころ相互の関連づけ

観光ルートに沿って、複数の見どころがある場合、見どころ相互に関連性をもたせることも大切です。物語性の構築にも役立つし、個々の見どころの意味が豊かになって旅行者の興味関心を高めます。

自然の歴史（自然史）を生かすエコツアーの場合は、遠い過去から近い過去、そして現在に向かって、時系列に沿って順番に説明がなされると理解しやすくなります。もちろん実際の現場では、新旧の時代に関わる見どころが時代に沿って規則的に並ぶことはありません。それでも、少しでも時系列の順序を意識し、ルート選定や動線、プログラム構成や語る順序等を意識することによって、わかりやすさは大きく変わります。

⑷　過去と現在との結びつけ

自然の歴史（自然史）を生かすエコツアーでは、ガイドが数万年、あるいは数千万年といった遠い過去の出来事について説明をする場合があります。その際、その出来事が現在の私たちの暮らしや自然環境にどういう影響をもたらしているのかといったことを説明に加えておくことが重要です。

一般の方に向けて地形や地質の話提を提供する際に、過去の出来事について過去の説明のみで終わってしまうと、聞き手にはただのお話としてしか伝わらないことがよくありました。過去の説明をなるべく身近な具体例と関連づけ、過去の歴史と今とのつながりが見えるように話すことを心がけると、聞き手の目の輝きが変わります。地学の専門家や愛好家でない限り、地質学的な遠い過去の出来事は人ごとであって、なかなかそれをわが事として受け止められないのは当然のことです。自然史の説明の後に、「ロマンがあってよいですね」という感想をいただくことがあります。しかしそのような感想には、素直なほめ言葉であることもあれば、「現実離れしたお話で(私にはとてもついていけません)」というマイナスの意味合いをもつ場合もあります。

たとえば「海底に住んでいた生き物の化石が現在山の上にあるのはなぜなのか」、あるいは「石の性質が地場産業や土地利用、地すべりなどの災害とどのように関係しているのか」、「珍しい生きものの生息とこの場所の地形や地質がどのように関係しているのか」というようなコメントがあると、遠い過去の出来事がぐっと身近に感じられることになります。

⑸　柔軟な対応

ツアーはあらかじめ準備したプログラムに沿って、予定時間内に展開するのが基本ですが、良くも悪くも事件が起こります。実際にエコツアーを行ってみると、予定外の事象に遭遇したり、参加者による面白い発見があったりすることがあります。また野外活動であれば、天候の急変等によって予定を変更せざるを得ない場合も想定しておく必要があります。ガイドは、そういった場合にあわてることなく、むしろそのような時こそプロの意識と配慮をもって、逆に予定外の事件をツアーに活用するくらいの度量をもっていただければと思います。

たとえばツアーの途中でたまたま珍しい動植物に出会うとか、面白い発見があったようなときには、たとえプログラムにはなくても、その事象をツアーに活用します。その観察に時間をとれば、予定していた見どころを一部変更することもあります。それは、ドラマの中でアドリブの演技を楽しむことにも似ています。予定していなかった一期一会の体験を参加者同士で共有することは人生の喜びにも通じることなので、いやおうなしに旅行者の参加意欲が高まります。プログラムを多少変更しても、それが忘れられない記憶として旅行者の心に快く刻まれるのであれば、予定を変更する価値は十分にあるでしょう。

ツアーの現場においての柔軟な対応は、ガイドが日頃から豊かな経験とたくさんの知識の引き出しを用意していないと出来ません。もしその発見が、自分がよく知らない事象である場合は、無理をしてあやふやな解説をせず、旅行者と一緒に考えてみることも“あり”です。プログラムに若干の余裕をもたせてあれば、そういった臨機応変の対応がしやすくなります。

図３－１　信州は”自然史王国”（上高地）